

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520855

研究課題名(和文) 中国における初期の馬具

研究課題名(英文) Early horse harness in China

研究代表者

高浜 秀 (Takahama, Shu)

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：60000353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 商代後期の中国最古の馬具は、西アジアに起源を持つ。この時期には二枝式の銜が発明され、西周時代前期に改良されて一部分が捩じれた形になった。西周前期には3孔を持つ角製のヒョウが西方から伝来し、それを青銅で模したものが発展して西周時代の代表的な型式のヒョウが成立した。西周後期から春秋前期にかけて、銜の外環が大きくなり、そこにヒョウを差し込む型式のくつわが成立した。シベリアでも類似型式が広まったが、それよりも早い。

銜の鑄造には二方法がある。西周時代には、捩じれた8字形部分を2枚の鑄型で鑄造したが、戦国時代には同一平面にある8字形部分を2枚の鑄型で鑄造するようになった。

研究成果の概要(英文)： Horse culture was brought in China in the 2nd millennium B.C. In Anyang were found rod-shaped horse-bits, square-shaped cheek-pieces and U-shaped objects with nail like projections, which were originated in Western Asia. Chain-like horse-bits, made of two 8-shaped parts, were invented in late Shang period, one of which was twisted for innovation in early Western Zhou period. Antler cheek-pieces with 3 holes were brought from the West in early Western Zhou period, and their bronze copies developed into the most typical type of bronze cheek-pieces of this period. From late Western Zhou to early Spring and Autumn period, outer rings of horse-bits became larger, in which inserted now elongated cheek-pieces. Similar horse harness appeared in Siberia in a little later period.

Two different processes for casting cheek-pieces are recognized, one for Western Zhou period, the other for Warring State period.

研究分野：考古学

キーワード：馬具 銜 くつわ 青銅器 鑄造 中国 商代 西周時代

1. 研究開始当初の背景

馬車が中国へ西方から来たことは、多くの研究者によって認められている。西アジアでは、前4千年紀の橇のようなものからスポークを持った馬車・戦車へ、発達してきた過程が考古学的に裏付けられているのに対し、中国では商代後期になって、突然に十分に発達した馬車が現われる。

中国においては、馬車はかなり詳細に研究されているのに比べて、より基本的な、馬に直接着ける馬具に関しては、最近の研究もあまり多くなく、研究がそれほど進んでいないように思われた。

さらに気になったのは、馬文化が西方から来たということは、かなり一般的に認められているのに対し、それ以後の西方との関係は、馬文化に関しては、ほとんど研究されていないことであった。中国考古学では、馬具に関してシベリアとの関係はほとんど言及されないし、シベリアにおいても、アルタイなどの初期遊牧民の馬具は詳細に調査・研究されているが、それらと中国との関係が問題にされることはほとんどない。これは奇妙なことに思われた。

2. 研究の目的

中国の馬具の起源を考古学の上から具体的に明らかにし、その発達過程を跡付ける。それに伴い、シベリア・中央アジアとの関係、ひいては、間接的かもしれないが西アジアとの関係をも明らかにし、中国の馬文化の世界史的な位置を明らかにする。これが私の目指している最終的な目的であるが、今回の研究の目的は、まずは中国の馬具の発達過程を明らかにすることである。

3. 研究の方法

中国の遺跡から出土した馬具を調査する。自分の目で見て、写真を撮影し、実測図を作る。また中国から出版されている馬具の掲載された報告書を集めて、その型式学的な発達過程を考察する。シベリア・中央アジアにおいても同様に初期遊牧民時代の馬具を調査する。

シベリア・中央アジアとの関係を念頭に置いて調査することを除けば、上に述べた馬具の調査法自体は、考古学としては基本的で当然のことである。しかし日本では、それが行なえる環境はない。日本に所在する中国考古学関係のコレクションに、美術的価値の低い馬具は比較的少なく、また種類にばらつきがある。すなわち、方形のヒョウを除けば、商代の馬具はおそらく存在しない。西周時代のヒョウは少数所蔵されているが、銜はほとんどない。春秋戦国時代では、銜がある程度存在するだけである。

中国においても、直接発掘に携わった研

究者以外には、この問題を考察することは難しいであろう。特に銜に関しては、通常発掘報告書に掲載されるのは銜の一面から見た輪郭の図だけで、それだけでは立体的な実際の銜の形を想像することは難しい。

これは調査を始めてすぐに気が付いたことであるが、銜の形、特に西周時代のそれを知るには、2面から見た図、あるいは写真が必要である。現在報告書に掲載されている図から研究を進めることは極めて困難であり、実際に実物を見て、写真・図を作らなければならない。これは特に鑄造法を考えるためには必要である。中国人の研究者にとっても同様であり、広く通時的に見渡すことは難しいであろう。またシベリア・中央アジアの情報ほとんどないと思われる。

今回の研究においては、河南省安陽殷墟出土の中国最古の馬具をはじめ、陝西省の西周時代の墓地、河南省の西周時代の墓地、山西省の西周墓地から出土した馬具を調査した。また日本国内でも東京国立博物館、早稲田大学会津八一記念博物館、天理大学附属天理参考館、和泉市久保惣記念美術館、横浜馬の博物館、横浜ユーラシア文化館などに所蔵されている中国の馬具を調査した。

また中国の馬具との関係を考察するため、ロシア、モスクワの国立歴史博物館、国立エルミタージュ博物館、バルナウルの国立アルタイ大学博物館、ミヌシンスク郷土博物館、アバカンのハカス共和国郷土博物館、カザフスタンの中央博物館、国立博物館所蔵のシベリア・中央アジア馬具資料を調査した。

4. 研究成果

(1) 中国におけるくつわの発展

現在、中国の馬具、とくに銜、ヒョウの発展過程を詳しく述べた論文は、中国でもないようである。発展過程の概略を述べたものはあるが、実際に遺物に即して詳述したものは見当たらない。

今回の遺物の実見調査と、発掘報告書などに記載されている図・写真などを併せて考えると、中国における馬具の発達は、おおむね以下のものであったと思われる。

前2千年紀の前半頃、西方からおそらく中央アジア・シベリアなどを經由して、青銅製の棒状の銜と、内側に突起のあるヒョウをその両側に配したものが伝わった。例えばパレスチナのガザでは、棒状の銜の両側に、透かしになった円形のヒョウが付けられており、ヒョウには内側に突起がある(図1)。

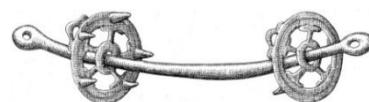


図1. ガザ出土

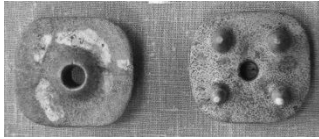


図2. シンタシュタ出土
円盤型ヒョウ

ユーラシア草原地帯の西側、ウラル以西では骨・角製の円盤状のヒョウが多く発見されているし(図2) タジキスタンでは、同様なものと、両端にループのある青銅製の棒状の銜と思われるものが、出土している。似た棒状の銜は、商代後期の都、安陽殷墟や、西安老牛坡で発見され、また西周時代前期の幾つかの遺跡でも発見されている。同時に発見されるヒョウは、青銅製の方形のもので、内側に突起のあるU字形金具と共に使用されることがある(図3、4)。これらは、西方の影響を受けて出現したと考えるべきであろう。

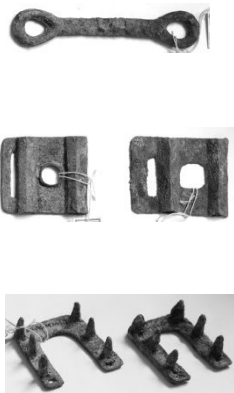


図3. 殷墟出土棒状銜、
方形ヒョウ、U字形金具

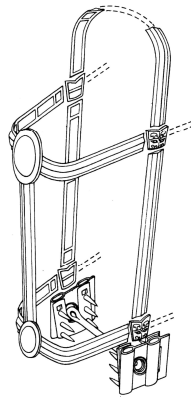


図4. 山東省前掌大出土
くつわ復元図



図5. 殷墟出土鎖状銜

また商代後期には、8字形のものを2つ、あるいは3つ鎖状に組み合わせた銜も発明され、安陽で出土している(図5)。

西周時代前期になっても、方形のヒョウは以前と同様に使用され、U字形金具も同様に発見されている。西周時代前期から中期にかけては、円形のヒョウも作られた。これは時折、銜と一体に製作されている。

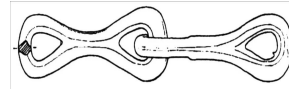


図6. 陝西張家坡出土銜

西周前期になると、8字形のものを2つ鎖状に組み合わせた銜は、8字形の一つが、2孔が異方向を向く形のものに変化する(図6)。これは、おそらく銜の両端の環が同一平面上にあることが重要だったためであろう。

西周時代前期頃に、角あるいは骨製のヒョウが西方から伝来した。これは一方が細い角形に3孔が開くもので、中央の孔は、他の2孔とは異なった方向に開けられる。これを2本、銜の両端に装着する。この種のヒョウは、西ヨーロッパ、黒海沿岸、ウラル地方、ウズベキスタン、西シベリア、南シベリア、ザバイカル地方などに広く分布しており、殆どが青銅器時代後期、前10世紀ごろを中心にした時期のものである。おそらく起源はヨーロッパにあり、それが中国まで到達したのである。中国では西周時代前期の北京琉璃河墓地、平頂山応国墓地などで出土しており(図7)、また内蒙古東部の夏家店上層文化や、その後の幾つかの文化でも用いられた。



図7. 平頂山応国墓地
出土骨角製ヒョウ

西周時代前期にはこの角製のヒョウの形を模した青銅製のヒョウが製作された。これがその後の中国の主要な青銅製ヒョウの原型となる。初めは例えば陝西省宝鸡市茹家荘で出土しているような、角形そのものを青銅で作ったものであったが(図8)、後に平たく、内側が凹形をなすものになり(図9)、中央孔の両側の2孔は鈕に変化した。初めは簡単な紋様しか施されなかったが、後には、「卷首型」と呼ばれるような、一端に曲線紋様が渦を巻く形のものになり(図10)紋様は全体的に中国的なものになる。これが西周中期の代表的なヒョウの型式である。



図8. 陝西宝鸡茹家荘出土
青銅製ヒョウ

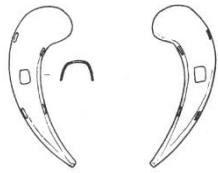


図9. 天馬曲村出土ヒョウ

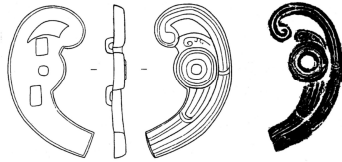


図10. 平頂山応国墓地出土ヒョウ

上に、西周時代前期の銜が、鎖状に連結された2つの部分からなり、その一つは2環(孔)が90度捻じれた形になったことを述べた。ここでは説明の都合上、2環が同一平面上にある部分をA部、環(孔)が90度捻じれた形の部分をB部と呼んでおく(図11)。

A部の平面形は、初めは少し角張った8の字形を呈していたが、後の西周中期頃にはA部内環は大きなしずく形のループ状を呈し、軸部が長く、A部外環は小さな円形または方形を形作るような形に変化する(図12)。B部は全体としてしずく形に外環が付いた形を呈し、内側のしずく形部分に大きな孔が開いて環となっている。

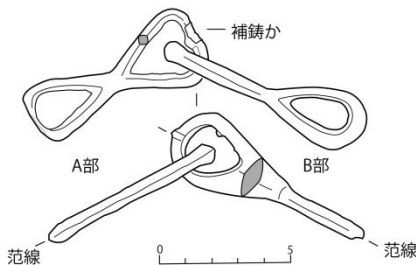


図11. 平頂山応国墓地

出土ヒョウ

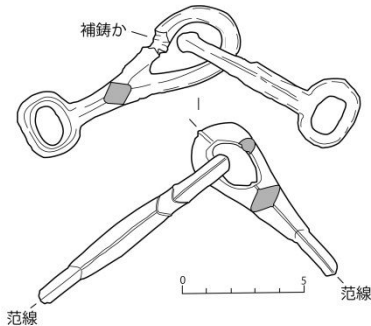


図12. 平頂山応国墓地出土ヒョウ

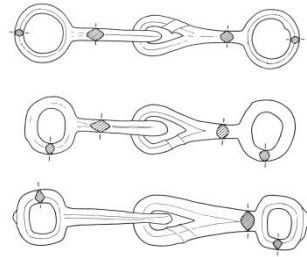


図13 三門峡カク国墓地出土銜

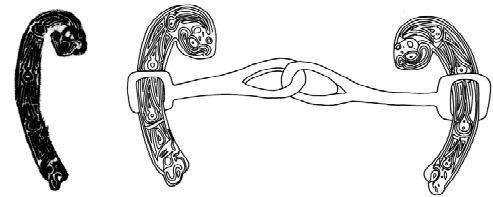


図14. 韓城ゼイ国墓地出土くつわ

西周後期から春秋前期にかけて、銜とヒョウには大きな変化が起こった。銜はそれまでよりも大きくなり、両側の外環も大きくなって、それぞれヒョウを差し込むようになったのである(図13、14)。それまでは銜とヒョウは革紐で結縛されるか、円形ヒョウの場合は鎖状に一体に鑄造されるかであったと思われる。

この変化に伴って、ヒョウには中央の孔がなくなり、細長くなった(図14、15)。裏面には以前には2つあるいは3つの鈕があったが、この後は2つに統一された。ヒョウの形には幾つかの種類があるが、構造はほぼ同じである。この変化は、中国の馬具の発展史上極めて重要で、一つの画期とも言えるであろう。この変化の結果成立したくつわの型式が、その後長い間、用いられることになる。

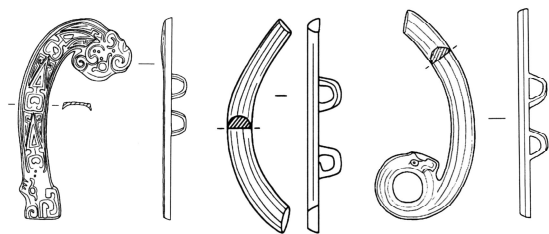


図15. 西周後期～春秋前期の各種のヒョウ

(2) シベリアとの関係

シベリアにおいても、これと似た馬具の変化が見られる。シベリアにおいて最も早い銜は、トゥバのアルジャン1号墳から出土した銜である。これは前9世紀頃と考えられており、同一方向に3孔の開いたヒョウ

ウを伴っている。その後続く型式は、ヒョウに小さな棒状突起があって 字形を呈するものや、ボタン状突起があるものなどである。そしてその後になって、2孔をもつヒョウを銜の外環に差し込む型式のくつわが現われ、それがその後長期間用いられることになる。

このように、中国でも、シベリアあるいは中央ユーラシアにおいても、このように互によく似た馬具への転換が起こり、その結果が広く長く用いられることになった。

この型式変化は、互に関連したものと考えられる。ではどちらの地域で初めてこの新型式の馬具が発明されたのだろうか。

年代でいうと、中国では西周時代後期から春秋時代前期で、前9世紀から8世紀にかけてと考えてよいであろう。シベリアではトゥバのアルディ・ベリにおいて最も早い例が知られており、前7世紀半ば頃と考えられている(図16)。そうすると、年代としては中国の方が早いことになるし、型式学的に考えても、中国のくつわからの変化を考えるほうが無理がない。

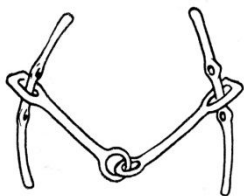


図16. アルディ・ベリ出土くつわ

(3) 鑄造法の問題

今回の調査研究において、注目したもう一つのこと、銜の鑄造法であった。殷墟出土の銜は8の字形が鎖状に3個つながったものを見ることができた。しかし銹のため范線は明らかでなく、鑄造のための鑄型については情報を得ることができなかった。

しかし西周時代の銜については、范線が明らかなものがあり、決定的ではないまでも、かなり重要な手掛かりを得ることができた。河南省文物考古研究所と平頂山博物館で調査した平頂山応国墓地出土の銜には、B部の外側を巡る明らかな范線が見え、それが上下2枚の鑄型によって鑄造されたことを推測できた(図11、12)。内環に開けられた孔は、鑄型に水平方向に棒状のものを挿入することによって作られたと思われる。孔の壁が平ら、あるいは断面では直線を呈するものが多いことから、その推測は裏付けられる。

A部もおそらく2枚の鑄型で鑄造されたと思われるが、その一部に切れ目のようなものを作っておき、B部を切れ目から嵌め込んだ後に補鑄によって塞いだという推定が、平頂山応国墓地の発掘報告で述べられている。おそらくそれが正しいのであろう。A

部の比較的早いものと思われる角張った8の字形の場合は、内環の端部に補鑄の跡と思われるものがあり(図11)西周中期頃と思われる銜の内環には、比較的後部に痕跡がある(図12)。まだ十分な例数を見ないが、時期によって鑄造法が変化した可能性がある。

これら西周の銜の鑄造法は、私には意外なものであった。というのは、以前に見た銜の多くは、A部の范線が周囲を完全にめぐっており、2枚の鑄型で単純に鑄造されたことを示していたからである(図17)。そしてB部の内環の端部に何かしら複雑な工程を示すような痕跡が見られた。すなわちA部を鑄造した後、B部を鑄造する時に、これを何らかの方法で内環に組み込んだと考えられる。これらの銜は春秋戦国時代のものと思われるが、実際、山西省侯馬の鑄造遺址から戦国時代のものと思われる銜の鑄型が出土しており、それはA部の片面の完全で単純な鑄型である(図18)。

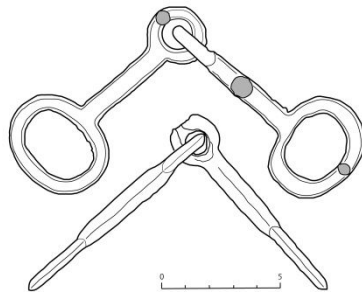


図17. 春秋戦国時代の銜

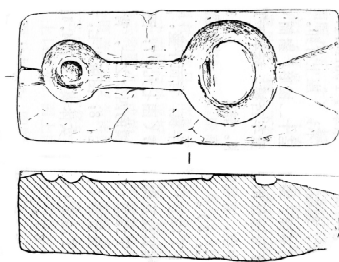


図18. 侯馬出土の銜鑄型

これは中国先秦時代の銜の鑄造には2つの方法があり、西周時代の方法から戦国時代の方法へと入れ替わったことを示している。河南博物院には、輝県琉璃閣甲墓出土の銜が陳列されていたが、その中には、B部が上下2枚の鑄型で鑄造されたような痕跡を示すものがあつた。これは西周時代以来の鑄造法が、春秋時代中期頃まで用いられていたことを示している。

今回の研究では、シベリアと中央アジアの銜も調査した。それらは、全体としては中国のものと同種の形であり、多くは戦国時代のものによく似た鑄造の痕跡を示している。例えばウズベキスタンのウイガラク

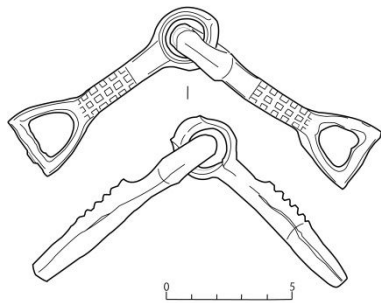


図 19．ウイガラク出土の銜

は、初期遊牧民時代の早いころの墓地と考えられているが、そこで出土した銜も同様な痕跡を持っている(図 19)。年代は前 7 世紀頃と考えられ、中国の戦国時代よりは早い。また南シベリアのタガール文化の銜も同様である。そうすると、あるいはこの銜の鑄造法は西方から伝わったのかもしれない。2つの鑄造法が、いつ、どのように入れ替わったかという問題については、中国の銜のそれぞれの年代の検討をも含めて、さらなる調査が必要である。

(4) 二枝式銜の起源問題

もう一つの重要な問題は、草原地帯における二枝式銜の起源問題である。黒海北岸では前 10 世紀以前に遡る棒状銜および二枝式の銜が発見されている(図 20, 21)。それらの銜は、トゥバのアルジャン 1 号墳出土品よりも古く、草原地帯最古の金属製銜と考えられている。それらと中国の銜がどのように関連するのか、あるいはしないのかを検討することが必要であろう。中国では 8 の字形の金具を 2 個あるいは 3 個組み合わせ合わせた銜が商代に登場し、それが変化していく過程をたどることができた。また二枝式の銜の外環が三角形を呈するものも、その中から現われている。それを考えると、中国でこの型式の銜が成立してすぐに、西方へ影響を与えた可能性も考慮に入れる必要があると思われる。



図 20．ヴィーンヌイツャ出土銜

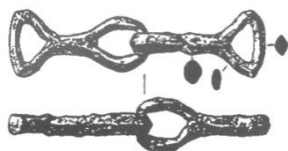


図 21．ホルディイフカ出土銜

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

高濱 秀

「中国初期のくつわをめぐって 西周時代のいわゆる角形ヒョウを中心に」『金沢大学考古学紀要』35 号(2014), 25-44 頁, 査読無

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高濱 秀 (Takahama, Shu)

金沢大学・人間社会研究域・客員研究員

研究者番号：60000353

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：